光林寺寺報　第8号　平成25年8月8日発行

なますて

※「なますて」とは・・・ インドのあいさつで「おはよう」や「こんにちは」の意味で使われます。
我々の称える「南無」の語源とも言われています。

ごあいさつ

ある小学校での話、保護者の方から「給食費を払っているのに、『いただきます』と子どもに言わせるのはおかしい」というクレームがあったそうです。また、ある先生は、「手を合わせることは宗教的な行為なので、子ども達にはやらせません…」と言ったということも聞きました。

なんか変ですよね。『いただきます！』というのはどういう意味なのか今一度考えてみましょう。私たち人間は食べ物を摂らずには生きていけません。お米でも野菜でも、魚や肉でも、何でも生きているもの…すなわち『いのち』あるものをいただいて生きているわけです。直接的であれ間接的であれ「殺生」をしなければ生きていけない存在なのですね。

ですから、『あなたの尊いいのちをいただきます！』『あなたいのちをいただきました。ありがとうございます。ごちそうさまでした！』と、手を合わせて感謝するわけです。精進料理の心は、このいのちを大切にしましょう！という精神なのです。もちろん米にも野菜にもいのちはあるのですが、人間が生きていくための最小限のものは許していただくという謙虚さが大切だと思います。

少し話はそれますが…先日の「佐和子の朝」に出演していた生物学者の長沼毅さんが、「私はこぼしたごはんでもなんでも食べますよ。人間多少の雑菌を体に取り込んだ方が丈夫になるんです…」とおっしゃっていました。なんかとても新鮮と言うか、感動を覚える言葉でした。毎年おこなっている寺子屋合宿では、食前に「ひとつぶのお米も一滴の水も、みな天地の命なれば、感謝していただきます！」と手を合わせて唱えます。そのへんの雑草を採ってきては天ぷらにしていただいたりします。これが意外に子供たちにも好評だったりするのです。自然や動物に対する「感謝」と「謙虚さ」を忘れないようにしたいと思います。

美味しいお肉や魚が食べられることへの感謝の気持ちを、「いただきます」・「ごちそうさま」という形としてあらわすことが大切です。そして大人たちが範を示していれば、子ども達は自然と倣っていくはずです。子ども達に強制するのではなく、まずは大人から…。

★別刷りの「いのちをいただく」という文章、少し長いですけど目を通していただきたいと思います。
そして「いのちをいただく」ということについて、家庭で話題にしていただければ幸いです。

豊沢光林寺公園清掃奉仕

毎年、皆様にご協力をお願いして行っております「豊沢光林寺公園清掃奉仕」を去る6月30日に行いました。

例年であればその年の開山忌塔前地区の檀信徒の皆様にご協力いただいておりますが、今年は「庫裡等増改築及境内整備工事」の関係で該当地区がありませんでした。そこで、豊沢地区の檀信徒有志の方々に清掃奉仕をお願い致しました。

豊沢地区の皆様には快くお引き受けいただきました。誠にありがとうございました。

なお、来年からは従来通り該当地区の皆様にお願いしたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

来年の塔前予定

（春）松林寺・富沢・糠塚・二枚橋　　（秋）八幡・嶋岡

ご協力の程、よろしくお願い致します。

庫裡増改築及境内整備工事経過報告

庫裡等改築及境内整備工事は、檀信徒の皆様のご理解とご協力により、本年3月に着工致しました。着工に先立ち、寺族・工事関係者出席の下、安全祈願を執り行いました。

現在(8/8)までに、信徒用のトイレ(6月中旬完成)と檀信徒用台所(7月中旬完成・現在寺族使用中)・庫裡屋根裏防火隔壁工事が完了致しました。また、屋外トイレ等新築工事につきましては史蹟発掘調査が5月中に行われた為少々遅れておりましたが、現在基礎工事まで終了致しました。

今後は史蹟発掘調査(解体した庫裡部分)が盆明けより本格化し、調査が済み次第(9月中予定)、庫裡増改築工事や上人用トイレ・物置改築工事を行う予定です。

このような状況から、工事の完了が当初(今年中)より1ヶ月程度、延びる見込みです。皆様には何かとご不便、ご心配をお掛けしますがご理解下さいますようお願い申し上げます。

なお、各総代・組頭さんに寄付金の集金をお願いしております。何卒、ご協力よろしくお願い致します。また、工事中は足もとの悪い所がございますので、ご来山の際は充分にお気をつけ下さい。

↑安全祈願　地鎮祭

↑発掘調査(屋外トイレ予定地)

↑信徒用トイレ　外観

↑屋外トイレ基礎工事(8/8現在)

↑信徒用台所　外観

↑発掘調査(庫裡新築予定地　8/8現在)

第50回光林寺寄席

毎年、恒例の『光林寺寄席』が6月15日(土)に開催されました。
第50回という節目にお呼びしたのは、名人の呼び声高い、現落語協会会長『十代目 柳家小三治』師匠です。
小三治師匠には第20･36回にお越しいただいています。
「今、最も客を呼べる噺家」と言っても過言ではなく、今回も発売開始から順調にチケットが売れ、早々に売り切れたプレイガイドもありました。当日は天候にも恵まれ、200名を超える観客にご来山いただきました。
今回は小三治師匠の孫弟子にあたる「柳家ろべえ」さんに前座を勤めていただきました。
小三治師匠には『小言念仏』と『芝浜』の二席を演じていただきました。『小言念仏』は小三治師匠の十八番として有名ですし、『芝浜』は人情話の名作とされています。
小三治師匠の高座は素晴らしいの一言に尽きます。話が上手い、面白いと言うだけではありません。例えば、舞台に上がって辺りをゆっくり見渡し、ゆっくり座る。それだけで"絵"になる。改めて感動しました。また、観客の皆様の雰囲気も素晴らしく、素敵な『寄席』が出来上がったと思います。つくづく寄席にとって「観客」がいかに重要なのかを再認識しました。これも30年･50回の歴史が作り出してくれたのだと思います。

柳家小三治師匠

今回は50回記念と言うこともあり、中入りには「夢舎夢舎」お菓子が、寄席終了後には小三治師匠の色紙･手ぬぐいが当たる抽選会を開催しました。(色紙･手ぬぐい当選者には、なんと握手つき＼(‘ jjj ’)／)当選者の皆さん、おめでとうございました。
また、今回も裏千家髙橋宗章社中の皆さんにお茶席のご協力をいただきました。ありがとうございました。

↑小三治師匠と握手

次回の第51回光林寺寄席は『永六輔』さんをお招きします。
光林寺寄席を始めるきっかけであり、第一回目の出演者でもあります永さんをお迎えし、5"1"回目を迎えたいと思います。
これからも光林寺寄席をよろしくお願い致します。

大和講光林寺支部
陸前高田慰霊鎮魂の旅

大和講光林寺支部では毎年研修旅行を開催しております。今回は5月26日(日)に陸前高田市へ東日本大震災慰霊鎮魂の為に伺いました。参加者は50名、天候にも恵まれました。

まず、市内に設置された追悼施設にて御回向と御詠歌の奉詠を致しました。

その後、「三日市仮設住宅」へ伺いました。こちらは広田湾が一望できる高台にあります。こちらでも、湾に向かっての御回向と御詠歌の奉詠を致しました。奉詠後、集会所にて入居者の皆さんとのお茶会を催しました。楽しい一時を過ごさせていただく事が出来ました。

最後に市内の普門寺に参拝しました。こちらのお寺には、高田松原の倒木から作られ、奉納された「親子地蔵」が安置されており、お堂前で御回向と御詠歌の奉詠を致しました。

震災から2年以上経過しているとはいえ、未だ復興にはほど遠い現状ですし、悲しみもまだ癒えていません。被災者の皆さんに少しでも元気になってもらえればと思いますし、参加者の皆さんには今回の旅の経験を今後に生かしていただければと思います。

最後に、我々を笑顔で迎えていただき、ご接待下さった三日市の皆様に心より御礼申し上げます。

↑追悼施設にて

↑普門寺にて

↑三日市仮設住宅にて

↑三日市仮設住宅より広田湾を望む

↑集会所にてお茶会

秋季開山忌のご案内

◎日時　平成25年11月23日(土・祝日)

午前10時00分　御詠歌

午前11時00分　開山忌法要

※工事中の為、食事の提供はございません。

※富沢・糠塚・松林寺・二枚橋の皆さんには
来春の開山忌の塔前(当番)をお願い致します。

光林寺のホームページ(HP)が出来ました！

http://hanamaki-kourinji.jp/

まだ、少し寂しいHPですが徐々に充実させていく予定です(^_^)v　どうぞご覧下さい。

いのちをいただく

坂本さんは、食肉加工センターに勤めています。
牛を殺して、お肉にする仕事です。
坂本さんはこの仕事がずっといやでした。
牛を殺す人がいなければ、牛の肉はだれも食べられません。
だから、大切な仕事だということは分かっています。
でも、殺される牛と目が合うたびに、仕事がいやになるのです。
「いつかやめよう、いつかやめよう」と思いながら仕事をしていました。

坂本さんの子どもは、小学3年生です。
しのぶ君という男の子です。
ある日、小学校から授業参観のお知らせがありました。
これまでは、しのぶ君のお母さんが行っていたのですが、
その日は用事があってどうしても行けませんでした。
そこで、坂本さんが授業参観に行くことになりました。
いよいよ、参観日がやってきました。
「しのぶは、ちゃんと手を挙げて発表できるやろうか？」
坂本さんは、期待と少しの心配を抱きながら、小学校の門をくぐりました。
授業参観は、社会科の「いろんな仕事」という授業でした。
先生が子どもたち一人一人に
「お父さん、お母さんの仕事を知っていますか？」
「どんな仕事ですか？」と尋ねていました。
しのぶ君の番になりました。
坂本さんはしのぶ君に、自分の仕事についてあまり話したことがありませんでした。
何と答えるのだろうと不安に思っていると、しのぶ君は、小さい声で言いました。
「肉屋です。普通の肉屋です」
坂本さんは「そうかぁ」とつぶやきました。

坂本さんが家で新聞を読んでいると、しのぶ君が帰ってきました。
「お父さんが仕事ばせんと、みんなが肉ば食べれんとやね」
何で急にそんなことを言い出すのだろうと坂本さんが不思議に思って聞き返すと、
しのぶ君は学校の帰り際に、担任の先生に呼び止められてこう言われたというのです。
「坂本、何でお父さんの仕事ば普通の肉屋て言うたとや？」
「ばってん、カッコわるかもん。一回、見たことがあるばってん、
　血のいっぱいついてからカッコわるかもん…」
「坂本、おまえのお父さんが仕事ばせんと、先生も、坂本も、校長先生も、
　会社の社長さんも肉ば食べれんとぞ。すごか仕事ぞ」
しのぶ君はそこまで一気にしゃべり、最後に、
「お父さんの仕事はすごかとやね！」と言いました。
その言葉を聞いて、坂本さんはもう少し仕事を続けようかなと思いました。↗

ある日、一日の仕事を終えた坂本さんが事務所で休んでいると、一台のトラックが食肉加工センターの門をくぐってきました。
荷台には、明日、殺される予定の牛が積まれていました。
坂本さんが「明日の牛ばいねぇ…」と思って見ていると、
助手席から十歳くらいの女の子が飛び降りてきました。
そして、そのままトラックの荷台に上がっていきました。
坂本さんは「危なかねぇ…」と思って見ていましたが、
しばらくたっても降りてこないので、心配になってトラックに近づいてみました。
すると、女の子が牛に話しかけている声が聞こえてきました。
「みいちゃん、ごめんねぇ。みいちゃん、ごめんねぇ…」
「みいちゃんが肉にならんとお正月が来んて、じいちゃんの言わすけん、みいちゃんば売らんとみんなが暮らせんけん。
ごめんねぇ。みいちゃん、ごめんねぇ…」
そう言いながら、一生懸命に牛のお腹をさすっていました。

坂本さんは「見なきゃよかった」と思いました。
トラックの運転席から女の子のおじいちゃんが降りてきて、
坂本さんに頭を下げました。
「坂本さん、みいちゃんは、この子と一緒に育ちました。
だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。
ばってん、みいちゃんば売らんと、この子にお年玉も、
クリスマスプレゼントも買ってやれんとです。
明日は、どうぞ、よろしくお願いします」
坂本さんは、「この仕事はやめよう。もうできん」と思いました。
そして思いついたのが、明日の仕事を休むことでした。

坂本さんは、家に帰り、みいちゃんと女の子のことをしのぶ君に話しました。
「お父さんは、みいちゃんを殺すことはできんけん、明日は仕事を休もうと思っとる…」
そう言うと、しのぶ君は「ふ～ん…」と言ってしばらく黙った後、テレビに目を移しました。
その夜、いつものように坂本さんは、しのぶ君と一緒にお風呂に入りました。君は坂本さんの背中を流しながら言いました。
「お父さん、やっぱりお父さんがしてやった方がよかよ。
心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてやんなっせ」
坂本さんは黙って聞いていましたが、それでも決心は変わりませんでした。
朝、坂本さんは、しのぶ君が小学校に出かけるのを待っていました。
「行ってくるけん！」元気な声と扉を開ける音がしました。
その直後、玄関がまた開いて
「お父さん、今日は行かなんよ！わかった？」としのぶ君が叫んでいます。
坂本さんは思わず、「おう、わかった」と答えてしまいました。
その声を聞くとしのぶ君は「行ってきまーす！」と走って学校に向かいました。
「あ～あ、子どもと約束したけん、行かなねぇ」とお母さん。

（裏面へ続く）

坂本さんは、渋い顔をしながら、仕事へと出かけました。
会社に着いても気が重くてしかたがありませんでした。
少し早く着いたのでみいちゃんをそっと見に行きました。
牛舎に入ると、みいちゃんは、他の牛がするように角を
下げて、坂本さんを威嚇するようなポーズをとりました。
坂本さんは迷いましたが、そっと手を出すと、最初は
威嚇していたみいちゃんも、しだいに坂本さんの手を
くんくんと嗅ぐようになりました。坂本さんが、
「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんと、
みんなが困るけん。ごめんよう…」
言うと、みいちゃんは、坂本さんに首をこすり付けて
きました。
そ れから、坂本さんは、女の子がしていたようにお腹を
さすりながら、
「みいちゃん、じっとしとけよ。動いたら急所をはずすけん、
そしたら余計苦しかけん、じっとしとけよ。じっとしとけよ」と
言い聞かせました。

牛を殺し解体する、その時が来ました。
坂本さんが、
じっとしとけよ、みいちゃんじっとしとけよ」と言うと、
みいちゃんは、ちょっとも動きませんでした。
その時、みいちゃんの大きな目から涙がこぼれ落ちて
きました。
坂本さんは、牛が泣くのを初めて見ました。
そして、坂本さんが、ピストルのような道具を頭に当てると、
みいちゃんは崩れるように倒れ、少しも動くことはありませ
んでした。
普通は、牛が何かを察して頭を振るので、急所から少し
ずれることがよくあり、倒れた後に大暴れするそうです。

次の日、おじいちゃんが食肉加工センターにやって来て、
坂本さんにしみじみとこう言いました。
「坂本さんありがとうございました。昨日、あの肉は少し
もらって帰って、みんなで食べました。
孫は泣いて食べませんでしたが、
『みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるとぞ。
食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言うて食べてやらな、
みいちゃんがかわいそうかろ？食べてやんなっせ。』
って言うたら、孫は泣きながら、
『みいちゃんいただきます。おいしかぁ、おいしかぁ。』
て言うて食べました。ありがとうございました」

坂本さんは、もう少しこの仕事を続けようと思いました。↗

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

出典
『いのちをいただく』
著者　内田美智子　諸江和美
監修　佐藤剛史
出版社　西日本新聞社

ある学校で、保護者の一人から、
「給食費を払っているのに、『いただきます』と子どもに
言わせるのはおかしい」
というクレームがあった、との話を聞いたことがあります。
「なんという常識のない保護者なんだ！」と片付ける
のは簡単です。でも、もしもこの保護者が、この話を
知っていたとしたら、どうだったでしょう。
現在の食生活は、「命をいただく」というイメージから
ずいぶん遠くなってきています。
そしてその結果、食べ物が粗末に扱われて、日本での
一年間の食べ残し食品は、発展途上国での、何と
3300万人分の年間食料に相当するといいます。

私たちは奪われた命の意味も考えずに、毎日肉を
食べています。
動物は、みんな自分の食べ物を自分で獲って生きて
いるのに、人間だけが、自分で直接手を汚すこともなく、
坂本さんのような方々の思いも知らないまま、肉を
食べています。
動物だろうが植物だろうが、どんな生き物であっても、
自分の命の限り精いっぱい生き続けたい、そう願って
生きているんだと私は思います。
命をいただくことに対しての「思い」。
お肉を食べて「あ～、美味しい。ありがとう」、
お野菜を食べて「あ～、美味しい。ありがとう」
そこに生まれる思いはどんな思いでしょう？
お肉を食べて「うぇ～、マズッ！」
お野菜を食べて「うぇ～、マズッ！」
そこに生まれる思いはどんな思いでしょう？
食べ物をいただくとき、そこに尊い命があったことを
忘れずに、その命を敬い、感謝の言葉をかけてあげら
れる人に育ちましょう。

今日もまた、食べられることへの感謝の言葉、
「ありがとうございます。感謝します。いただきます」
食べているときの「美味しい！」という言葉。
そして食べ終わった後の、「あ～、美味しかった。
ありがとうございます。ご馳走さまでした」という、
「食べられたこと」への感謝の言葉をかけてあげましょう。
もちろん、食べ残しをせずに。
食べ物が、あなたの体を作ります。あなたの体に姿を
変えて、あなたの中で生き続けます。
そして、体の中からあなたを精いっぱい応援してくれて
います。
あなたができる最高の恩返しは、たくさんの生き物たち
から命のバトンを託されたあなたの命を、いっぱいに
輝かせること。喜びに満ちた人生を過ごすこと。
それが、あなたと共に生きているたくさんの命たちが、
いちばん喜ぶことなんです。
みんなの分まで、命いっぱいに輝きましょう。

…これが、私が教師として、プロとして、目の前にいる
子どもたちやその保護者に伝え続けていきたい
メッセージです。